

命は1反の田んぼと直結

T P Pで日本の農業は危機というが、40万畝の耕作放棄地があっても日本人としての自然管理責任を意識する人はまずいない。国土開発に伴う自然破壊に反対運動をする人はいるが、農業が日本の国土のメンテナンスをしていると思っている人は殆どいない。

当NPOは田んぼの生きもの調査活動を通じて日本の田んぼの保全を図り、T P Pが実施されても日本の稲作農家

が田んぼを耕作し続けられる仕組みを模索してきた。コウノトリやトキの放鳥に伴い、田んぼの生物多様性を高めるため、自然保護運動と農家運動を結びつける努力をしてきた。

残念ながら自然保護は反対運動に終始し、農家は差別化商品の意識から脱却できない。日本では有機農業運動が広がらないのは消費者が「食の安全」意識から脱却できず、

運動に終始し、農家は差別化商品の意識から脱却できない。日本では有機農業運動が広がらないのは消費者が「食の安全」意識から脱却できず、

有機農家は商品の差別化という意識から脱却できないからだ。私は地域でのゴミ減量や地域防災等の取り組みを通し、日常の暮らしの中の取り組みを通じて農地を保全し国土崩壊を免れれば良いと、気づいた。

私の地域では災害を想定して炊き出し食事を隔月で実施し、家庭の防災保存食として「玄米」の在庫備蓄を勧めている。生ごみを回収して発酵させ農地に入れて野菜を作る取り組みもしている。ゴミ処理工場の広域化に伴いプラスチックの分別回収が始まる中で、流通系の包材はメーカー責任を問うただけだったが、防災備蓄とごみ処理の2つの課題を解決する取り組みが始まったのだ。

玄米を地域住民に推奨するだけでなく、生きもの調査をしている産地から玄米を送って生かされている。「自分の命は1反の田んぼと直結している」と理解すれば、T P Pで安くて美味しい米が輸入されても、日本人としての行動原理は明白になる。日本人は暮らしの原点にある「1升枧」から気付くはずだ。

米袋はゴミ減量の取り組みとして各自持参が原則で、忘れたら有料。精米で出た糠はビスケットにしたり、畑の肥料にする。玄米仕入れ価格は米が持続的に生産できるよう設定し、玄米販売価格が高いという声は出ていない。私はこれが日本の究極的なT P P

精米機と枧



NPO 生物多様性
農業支援センター
理事長 原 耕造

農業と国土

暮らしの中で農地保全

徳川幕府が400万石といわれ、日本全体で2000万石だった。江戸時代の日本の人口約2000万人と符号する。

石高制が豊臣秀吉の太閤検地によって定められたことはあまり知られていない。教科書には太閤検地で年貢を納めさせたと書いてあるが、検地は農地面積を測っただけでなく、農地面積の単位も変更した。1石の米を生産するのに必要な水田面積を1反300

坪(約1000平方尺)と定めた。太閤検地前は1反が360坪で、当時の米の生産性を勘案して300坪に変更。日本人1人が生きるには1石の米が必要で、1石の米を生産するのに必要な面積を1反とした。

1升枧の玄米10個で1斗となり100個で1石。その1石は自分が生きるのに必要な食料。その向こうには1反の田んぼが広がっている。「自分は1反の田んぼに

対策であり、農地保全の意味が暮らしの中で位置づけられ、商品経済の発想から脱却できると確信する。従来の産直ではなく、離れている地域住民の協働活動を通じて暮らしの取り組みなので「地域協働活動」と名付け、私の地域では「地域協働マルシェ」を毎月開催している。

玄米だけでなく、ゴミ減量や防災に協力してくれる地域活動の取り組みも増やしており、こうした活動に取り組み市民団体や自治会、店舗を増やしたいと願っている。

玄米を地域住民に推奨するだけでなく、生きもの調査をしている産地から玄米を送って生かされている。「自分の命は1反の田んぼと直結している」と理解すれば、T P Pで安くて美味しい米が輸入されても、日本人としての行動原理は明白になる。日本人は暮らしの原点にある「1升枧」から気付くはずだ。

米袋はゴミ減量の取り組みとして各自持参が原則で、忘れたら有料。精米で出た糠はビスケットにしたり、畑の肥料にする。玄米仕入れ価格は米が持続的に生産できるよう設定し、玄米販売価格が高いという声は出ていない。私はこれが日本の究極的なT P P

昔は土地の生産性・価値を「石高制」で表した。「加賀百万石」とは、加賀藩の領地全体で100万石のお米換算の農産物が獲れることを意味し、100万人が生きていけることも意味した。当時の日本人が1年間に食べる米の量が1石(約150kg)だったからだ。

必要な水田面積を1反300坪(約1000平方尺)と定めた。太閤検地前は1反が360坪で、当時の米の生産性を勘案して300坪に変更。日本人1人が生きるには1石の米が必要で、1石の米を生産するのに必要な面積を1反とした。

1升枧の玄米10個で1斗となり100個で1石。その1石は自分が生きるのに必要な食料。その向こうには1反の田んぼが広がっている。「自分は1反の田んぼに

対策であり、農地保全の意味が暮らしの中で位置づけられ、商品経済の発想から脱却できると確信する。従来の産直ではなく、離れている地域住民の協働活動を通じて暮らしの取り組みなので「地域協働活動」と名付け、私の地域では「地域協働マルシェ」を毎月開催している。

玄米だけでなく、ゴミ減量や防災に協力してくれる地域活動の取り組みも増やしており、こうした活動に取り組み市民団体や自治会、店舗を増やしたいと願っている。

昔は土地の生産性・価値を「石高制」で表した。「加賀百万石」とは、加賀藩の領地全体で100万石のお米換算の農産物が獲れることを意味し、100万人が生きていけることも意味した。当時の日本人が1年間に食べる米の量が1石(約150kg)だったからだ。